第二次審査（論文公開審査）結果の要旨

Factors regarding suicide decline in Japan: A longitudinal study on psychiatric diagnosis of serious suicide attempters

日本の自殺減少の要因　重症自殺未遂者の精神科診断に関する縦断調査

日本医科大学大学院医学研究科　精神・行動医学分野
大学院生　大髙　靖史
Journal of Nippon Medical School（2022年）掲載予定

日本では自殺者数を減らすために、2006 年以降自殺対策を具体化かつ多様な対策を実施し、自殺者数は 2012 年から 2019 年まで連続して減少した。自殺者数の変動については、社会経済要因などから説明が試みられているが、2012 年以降の減少の要因についての報告は少ない。また自殺対策と精神科医療が自殺者数減少に及ぼした影響について十分には検討されていない。申請者は、自殺者と多くの共通点を有するとされる重症自殺未遂者を対象とし、自殺減少期に起きた変化を精神医学的観点から検討する研究を計画した。2006 年 1 月から 2017 年 12 月の間に日本医科大学付属病院高度救命救急センター（CCM）に入院した患者 21,271 名のうち重症自殺未遂者 942 名を対象に、自殺者数が減少に転じた 2011 年と 2012 年を基準に自殺減少前期（2006～2011 年）と自殺減少期（2012～2017 年）に分け、CCM 入院者に占める自殺未遂者と精神科診断の割合にどのような変化があったかを検討した。

その結果、CCM 入院者に占める自殺未遂者の割合は、全体、男性、女性のいずれも減少していた。精神科診断割合は有意に変化し、統合失調症、うつ病性障害、気分変調症、適応障害で減少していた。男女別では、男性では統合失調症、うつ病性障害、適応障害、女性ではうつ病性障害と気分変調症で減少していた。寄与率は、うつ病性障害（47.5%）が最も大きく、次いで適応障害　（22.1%）、気分変調症（20.6%）であった。男女別では、男性ではうつ病性障害（25.5%）、統合失調症（12.7%）、適応障害（11.3%）の順、女性では、うつ病性障害（22.1%）、気分変調症（16.7%）、適応障害（10.8%）の順に大きかった。

CCM に入院する重症自殺未遂者は日本の自殺者数と同様に減少していた。重症自殺未遂者の中でも頻度の高いうつ病性障害，統合失調症，適応障害と関連する重症自殺未遂者の割合が全体で有意に減少していることが確認された。特に、重症自殺未遂者数減少への寄与は、男女共通してうつ病性障害で最も大きかった。以上から、自殺減少期にこれらの精神障害による重篤な自殺企図が減少していたことが示された。

第二次審査においては、研究手法、自殺対策としてのうつ病治療の効果、併存疾患の影響、うつ病以外の精神疾患における変化、社会政策との関わりなど、多岐にわたる質疑が行われ、いずれに対しても適切な回答が得られた。

本研究は、日本の自殺対策の結果、自殺減少期に重症自殺未遂者における精神科診断がどの様に変化したかを明らかにすることで、精神科医療を含めた自殺対策が日本の自殺者数の減少に果たした効果を示しただけでなく、今後の更なる自殺対策に寄与しうる知見を示した研究としても高く評価できる。

以上から、学位論文として価値あるものと認定した。